

年パリ万国博、明治十四(1881)年第二回内国勸業博覧会までの期間については、出品制作のための工芸図案集として博覧会事務局が中心となって作成した『温知図録』八四帖の存在も近年明らかにされたが、それと類縁を示す作例が、フィラデルフィア美術館所蔵の70点ほどの陶磁器、青銅器のなかにも確認された。

明治初期の輸出用美術振興政策は、今日では「美術」とは言い難い実用工芸品に重きを置いており、89年のパリ博以前に日本政府による「美術」部門への出品はない。ところが、明治二三

(1890)年の第三回内国勸業博覧会ではっきりと美術行政の方向転換が計られ、絵画・彫刻と美術工業とは別の範疇に分離される。シカゴ博では、油彩画の出品が禁じられた一方で、美術の範疇に絵画、彫刻のみならず陶磁器、漆器、錦織なども含むという日本独自の美術観を強引にも主催者に認めさせる。ところが次の1900年パリ博では、逆に西洋の美術範疇に即した日本美術展示に徹する。今日我々が常識的に「美術」と思っている範疇の成立の裏には、実はこうした意外な紆余曲折が隠されていた。《老猿》は近代日本彫刻史の代表作となったが、《十二羽の鷹》はながらく所在不明の末、今では国立近代美術館別館の工芸館に収まっている。

『明治期万国博覧会美術品出品目録』東京国立文化財研究所編、中央公論美術出版／『明治デザインの誕生——調査研究報告書「温知図録」』東京国立博物館、国書刊行会

運載の海を渡った明治の美術

シカゴ・コロンプス博覧会再訪

国際日本文化研究センター研究員

稲賀繁美
Inaga Shigenami

高村光雲の《老猿》と鈴木長吉の《十二羽の鷹》。ともに明治二六(1893)年のシカゴ万国博覧会へ日本から出品された作品だ。仏師光雲は明治二二(1819)年37歳で、東京美術学校に新設された彫塑科の教授に抜擢されていた。このトキノキー木造りの原題は「木彫老猿之図置物」。美術学校教授というものが「おかしいほどにわけの分からん」ものであった作者本人に、西洋でいうところの「彫刻」作品を作るという意識がどこまであったか。対するに《十二羽の鷹》。元来は金工部門に出品される予定だったが、会期の途中で展示スペースが大幅に拡大されたこともあって、工芸館から美術館の彫刻部門に移動された。それも会場二階中央の吹き抜け周囲の欄干上という、特権的な場所を獲得しているのは看過できない。

このシカゴ万国博覧会を一部復元する展覧会が、東京の国立博物館で催された(四月三日から五月一日まで)。並行して明治美術学会では四月二六日の例会で「明治期内外博覧会出品現存作品について」という研究報告が行われた。慶応三(1867)年パリ万国博覧会から明治三三(1900)年パリ万国博覧会に至る博覧会への出品のうち、ヴィクトリア&アルバート美術館に80点、オーストリア国立工芸美術館に90点内外の作品が購入され、現在も保存されていることが、詳細に報告された。また明治九(1876)年の米国独立百周年フィラデルフィア博覧会、翌年の第一回内国勸業博覧会、明治一一(1878)